

オーディオ実験室収載

EQ カーブ対応トーンコントロールの調整(7)(HP 収載)

—LINN LP-12 からの位相反転—

1. 始めに

前報(6)に引き続き、LINN LP-12 からの再生のトーンコントロールの調整に加えて位相反転を検討します。

2. トーンコントロールの調整方法

前報(2)から前報(6)の配線は、以下のようにしていました。

前報(2)・前報(3)

LINN LP-12→ZANDEN Model 120→Leak Point 1(ライン入力)→TruPhase

前報(4)・前報(5)

Garrd401→STAGE1030→Leak Point 1(フォノ入力)→TruPhase

前報(6)

Garrad401→STAGE1030→Leak Point 1(フォノ入力)

→Brooklyn DAC+(ライン入力)→TruPhase

今回は、次のような配線を行います。

LINN LP-12→ZANDEN Model 120→Leak Point 1(ライン入力)

→Brooklyn DAC+(ライン入力)→TruPhase

* Leak Point 1 はトーンコントロール機能活用

* Brooklyn DAC+は位相反転機能活用

使用するアナログ盤は、前報(5)と同じものです。レンジが広く倍音も豊かなピアノ曲と倍音が豊かなヴァイオリンとコントラバスのピチカートが入った曲を選んでみました。

LINN LP-12 には Magic Mat II を敷いておきます。

LONDON 360R 56009

モーツアルト ディベルティメント 17 番

ウイリー・ボスコフスキー指揮ウィーンモーツアルト合奏団

ドイツグラモフォン MG2366

ベートーヴェン ピアノソナタ 30 番

ウイルヘルム・ケンプ (ピアノ)

TRIO (ACharlin) PA1117

ベートーヴェン ピアノソナタ 30 番

エリック・ハイドシエック(ピアノ)

RCA M2S728

ショパン バラード G minor

ウラジミール・ホロヴィッツ (ピアノ)

3. トーンコントロールの調整結果

今回は、まず ZANDEN Model 120 で盤本来のイコライザー特性で聴いておき、RIAA の位相反転なしとして、Leak Point 1 のトーンコントロールと Brooklyn DAC+ の位相反転でどれだけ盤本来のイコライザー特性のような再生に近づくか調べることです。

ボスコフスキー盤は、DECCA、R、第 4 時定数 High ですので、Leak Point 1 のトーンコントロールは中心位置、Brooklyn DAC+ で位相反転なしで、ZANDEN Model 120 では、この条件で聴いておき、さらに RIAA と位相反転なしの再生では Leak Point 1 でトーンコントロールを調整し、かつ Brooklyn DAC+ で位相反転します。RIAA と位相反転なしにしますと、バランスが崩れ、音の焦点が定まりません。トーンコントロール調整を Bass は 3 時、Treble を 3 時とし、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転しますと、バランスよく、音像が明瞭になって元の音に近づいてきます。

ケンプ盤は、TELDEC、R、第 4 時定数 Mid ですので Leak Point 1 のトーンコントロールは中心位置、Brooklyn DAC+ で位相反転なしで、ZANDEN Model 120 では、この条件で聴いておき、さらに RIAA と位相反転なしの再生では Leak Point 1 でトーンコントロールを調整し、かつ Brooklyn DAC+ で位相反転します。RIAA と位相反転なしにしますと、アタック感が後退し、音の焦点が定まりません。トーンコントロール調整の Treble を 3 時とし、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転しますと、アタック感が戻り、音の焦点があって元の音に近づいてきます。

ハイドシェック盤は、EMI、R、第 4 時定数 Low ですので、Leak Point 1 のトーンコントロールは中心位置、Brooklyn DAC+ で位相反転なしで、ZANDEN Model 120 では、この条件で聴いておき、さらに RIAA と位相反転なしの再生では Leak Point 1 でトーンコントロールを調整し、かつ Brooklyn DAC+ で位相反転します。RIAA と位相反転なしにしますと、アタック感が後退し、低音の量感と明晰さが不足し、音の焦点が定まりません。トーンコントロール調整の Bass は 2 時、Treble を 3 時とし、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転しますと、アタック感、低音の量感と明晰さ、音の焦点が元のレベルに近づいてきます。

ホロヴィッツ盤は、Columbia、R、第 4 時定数 Low ですので、Leak Point 1 のトーンコントロールは中心位置、Brooklyn DAC+ で位相反転なしで、ZANDEN Model 120 では、この条件で聴いておき、さらに RIAA の再生では Leak Point 1 でトーンコントロールを調整し、かつ Brooklyn DAC+ で位相反転します。RIAA と位

相反転なしにしますと、アタック感が後退し、低音の量感が不足し、高音から低音までぼやけてしまいます。トーンコントロール調整を Bass は 3 時、Treble を 3 時とし、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転しますと、アタック感、低音の量感が元のレベルに近づき、高音から低音まで明晰さが戻ってきます。

以上から、トーンコントロールの調整に加えて位相反転することにより、盤本来のイコライザー特性ではない RIAA の位相反転なしの場合でも盤本来のイコライザー特性の音質に近づくことが分りました。

4. まとめ

フォノステージが ZANDEN Model 120 であった前報(2)と(3)と前報(5)などのトーンコントロールの調整結果を、Leak Point 1 に応用し、併せて Brooklyn DAC+ で位相反転することで、RIAA の位相反転なしの場合でも盤本来のイコライザー特性の音質に近づくことが分りました。

以上